
クレヨンの色

高倉ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

クレヨンの色

【Nコード】

N2621A

【作者名】

高倉ナツ

【あらすじ】

不安と期待いっぱい的高校生活のはじまり。やりたいことなんかとくになくて、なんとなく過ごしてた。先輩の背中に想いを乗せて、不器用に恋をした。

*プロローグ

クレヨンみたいな青。

ふと眺めたこの空をなんて表現しよう？

乏しい知識をフルに回転させてしまつくらい、

青い青い空が広がっていた。

今すぐ窓から飛び出そうなんて思わないけど。

一度くらいあの空を飛んでみたいと思わないかい？

今なら飛べそうな気がするんだ。

悔しいくらい果てなく広がるこの空に？

いいえ。

大きなあなたの胸の中に。

…なんてね。

「あやか、プリントの5番なに？」

「え？」

あい きゃん ぶらい

自分の妄想が走り書きされたわら半紙に目を下ろした。

思わず思考もトリップしてしまつような空の下。

僕たちは、毎日同じこの学び舎で、同じ時間を過ごしてゆく。

歴史とか政治とか、ムズカシイ事はわからないけど、
希望や後悔の渦にのまれながらも
不器用に、一生懸命生きているんだ。

カラダほど成長していないココロで、
傷つきながらも必死に、自分と戦っているんだ。

悲しいとか、悔しいとか、どうしてこんな感情があるのだろうか。
嬉しいとか、楽しいとか、確かに噛締めているんだ。

どうやっても流れていく時間に、等身大の自分を乗せて。

今日も、青い空は広がっていた。

「ナイツシュ！」

しわくちゃになつたわら半紙を丸めてゴミ箱に投げ入れた。

1*キツカケ

誰が一番驚いているって、そりゃあ、あたしが一番驚いている。

「初めまして…えーと、杉山あやかです。よろしくお願いします」

おねがいしまーす、と緩い返事と拍手が送られる。

目のやり場に困って見つめた体育館の床はワックスが所々剥げて光っていた。

運動神経ナシ、体力ナシ。

15年の人生でスポーツマンだった事なんか一瞬のカケラもない。悪いけれど運動のセンスが全く感じられない、運動音痴の道をグレることなく進んできた。

そんなあたしが、『男子バスケットマネージャー』の肩書きを背負うことになるなんて、地球がひっくり返ってもあり得ないと思っただ。

それでも、そんなちっぽけなあたしを乗せて、気付けば今日もゆっくり地球は回っていた。

キツカケを聞かれたらそれはそれは単純なものです。

昔から想い続けていた先輩を追いかけて、とか、クラスで一目惚れした彼がバスケットで、とか、そんな甘い恋物語なんかはこれっぽっちもなくて。

同じ中学の知り合いだから、という理由でバスケット部員からマネージャーに誘われていたあたしに声をかけてきた彼女は、早くも『クラスで一目惚れした彼はバスケットだった』という小さな恋物語の主人

公だった。

そんな彼女に連れられ体育館に足を運んでいるうちに、ひしひしと感じたこと。

『今更引き下がれる雰囲気ではなくなってしまった』という無言の確信。

強制された訳でもなく、頼み倒された訳でもない。

それでも小心者で優柔不断なあたしには充分すぎる理由な訳です。

もちろん、嫌々な訳でもない。

マネージャーという響きに単純に魅かれていたということは、部活所属が原則だから…と自分に言い聞かせていたのだと後になって思う。

5

誰が一番驚いてるって、そりゃあ、あたしが一番驚いている。

マネージャーとはいえ自分が苦手な運動部に関わる事になったこと。それよりも自分が本当に入部する勇気があったこと。

いくら変わろうと決意しても、日常生活の中では入学とか新学期とか、環境の区切りもなければなかなかキツカケが掴めないこともある。

それは意思の弱い自分に対する言い訳なんだってこともわかってる。だけど、このチャンスは逃がしちゃいけないと思ったんだ。

運動が嫌いだっていう自分も、弱い自分も、変えられるような気がしたんだ。

「あやぱん、これから一緒に頑張ろうねっ」

そう笑う彼女は、くせっ毛らしい緩いウェーブと、笑うと無くなる大きなタレた瞳が印象的だった。

『あやぱん』、あたしはそんなキャピキャピしたあだ名で呼ばれるようなガラではないのに、彼女の口から発せられると何故かその浮かれた言葉もしっくりきた。

関草莉那。せき さりな。

漢字だけでは読むのに戸惑う、フィリピンとのハーフの彼女の名前。キャピキャピという言葉はもはや死語かという事は置いておいて。いかにも女の子の子供した雰囲気と入学当初からの素早い恋愛モードに、悪いけど正直『この子とは合わないな』と密かに思っていた女の勘というか、彼女には女の子の子供した雰囲気の中に、そのでっかい目からは恋愛モード真っ最中のオンナの怖さを感じられたから。

「入学した時からあやぱんのこと可愛いなあって見てたんだあ」

えへへ、と安い少女漫画のように笑うと、タレたまん丸な目もつと垂れる。

確かに感じていたけどね。

オンナの嫉妬の視線をチクチクと。

彼女が一目惚れしたというクラスメイトは、あたしの斜め後ろの席という単純な理由。

「私ね、良祐が好きなんだあ」

見ればわかるよ。

突然そう告げたられとき、周りで聞いていたクラスの女子みんなが声をそろえて思ったと思う。

『だから手出すんじゃないやねえよ?』

ああ、神様。続けてそう聞こえたのはあたしだけですか？

慣れないこの体育館が、あたしの高校生活のすべてになるのだろうか。

僕たちは、毎日同じこの学び舎で、同じ時間を過ごしてゆく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2621a/>

クレヨンの色

2010年10月28日03時04分発行